

大決壊

便秘女子たちの憂鬱



#1章目

二週間のカチカチうんち

P4



#2章目

わざとうんちおもらしっ

P42



#3章目

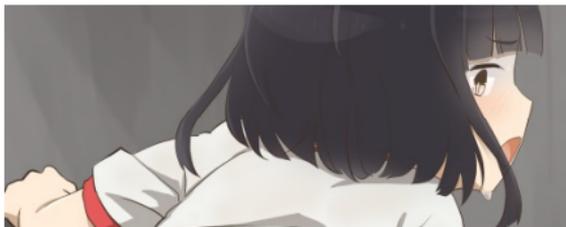
もりもりっ、膨らむスクール水着 P102



＃4章目

ブルマから溢れ出すモノ

P139



＃5章目

耐えきれず……授業中にうんちおもらし

P181



＃6章目

ショーツのなかで混じり合う二人 P228



既刊紹介

#1章目 二週間のカチカチうんち

「んっ、ううううう……」

深夜の自宅のトイレ。

洋式のトイレに腰掛けて、低い唸り声を上げている少女の名前は、小暮詩乃（こぐれ しの）と言った。

黒髪をショートボブに切り揃え、ヘーゼルの瞳は大きくて愛くるしい。

ただ、ちょっとだけ眠たげにジトツとしているけど。

そんな詩乃は成長期を迎えて花も恥じらう年頃となったが……ひとつだけ大きな悩みがあった。

「ううっ、今日も出てきてくれない……
はぁ、はぁぁ……っ」

顔を真っ赤にしてお腹に力を入れるけど、大腸内でカチカチに固まっているものは出てきてくれそうになかった。

——二週間の便秘。

それが小柄な少女のお腹に、ミッチリと詰まっている。

この二週間、いろいろなものを食べてきた。

ごはんパン、サラダに味噌汁、ビーフシチューやラーメンも食べた。

それがこのお腹にミッチリと詰まって、詩乃を苦しめている。

「ううっ、こんなにお腹張ってるのに、出てきてくれないなんて……
はあああああっ」

しゅiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii……。

どんなにお腹に力を入れても、出てきてくれるのはおしっこだけだった。

カチカチの便秘は、うんともすんとも言ってくれない。

「はぁ……今夜も出ない、か……」

今夜のところはこれくらいにしておいてやるぜ……。

詩乃は呟くと、おまたを拭いてショーツを上げる。

お気に入りの猫の顔がフロントプリントされているショーツ。

子供っぽいデザインだけど、小柄な詩乃だから穿くことができている。

服は家にいるときは洗い晒しのTシャツと3分丈のスパッツでいることにしていた。色気なんていらなないと思っているし。

「……お風呂入ろ……」

詩乃は呟くと、深夜のトイレをあとにするのだった。



(うう……憂鬱すぎる)

翌朝の通学路。

学校までは歩いて20分ほど。

七月の空は抜けるように青い。

病的なまでに色白の詩乃の四肢を容赦無く焼き、詩乃はジットリと汗ばんだ額を煩わしげに拭う。

夏という季節がここまで似合わない少女というのは珍しい。

(お腹、パンパンだし……っ)

二週間ものの便秘は、ただ歩くだけでも詩乃の体力をジワジワと奪っていた。

極度のインドア派の詩乃は、いつも家ではテレビゲームや本を読んで過ごしている。

だから酷い便秘は必然といえた。

(だけど、動きたくないし……)

と、言うわけで詩乃は酷い便秘といつもお付き合いしていることになる。

ただでさえお腹が張って苦しいというのに――。

詩乃には更なる悩み事があった。

それは、

(出てくるときは急に出てくるから気が抜けないぜ)

そう。

こんなにもカチカチに固まっている便秘は、便意を感じたときには一気に押しよせてくるのだ。

その力たるや、詩乃の貧弱な括約筋では阻止できないほどに。

そのビッグウェーブが、大体二週間に一度押しよせてくる。

つまり、そろそろその襲来がある、ということだ。

「はぁ……。お腹、苦しい……」

何度かため息をついているうちに学校に着く。

教室の自分の席につくと、いつものように読みかけのライトノベルを開いて朝のショートホームルームまで過ごすというのが詩乃のいつものパターンだった。

移動教室がない日は、トイレ以外は席を立つことはない。

それも極度の便秘の原因なのかもしれないけど、詩乃にはサラサラこの行動パターンを直す気はなかった。

こうして、いつものように朝の時間で読書に没頭している。

「おはよう、詩乃さん。今日も読書？」

「……………ん、おはよ、聖良さん」

読書を中断させられるのはあまり好きなことではないけど、聖良さんの挨拶だけは別だ。

クラスにあまり馴染めていない詩乃だけど、聖良だけとはなんとか言葉を交わすことができていた。

星原聖良（ほしはら せいら）。

聖良という少女を一言で言い表すのならば、ふんわりとしたお姉ちゃんキャラだ。

詩乃とは当然ながら同い年だけど、ふんわりとしたお姉さんのような雰囲気です。クラスメートの誰とでも分け隔てなく接

してくれる。

クラスでは学級委員長をしていて、いつもクラスをまとめてくれる、まさにお姉ちゃんのような存在だった。

聖良は、目が覚めるような金髪のロングヘアを、控えめなリボンで後ろにまとめている。

染めているわけではなくて、地毛だ。

それに大きくパッチリとした瞳は白夜のようなアッシュグレイで冷たい印象を受ける。

それでもいつもその表情は日なたのような笑みで満たされているので、詩乃は聖良のことは大好きだった。

……もっとも、そのことを口にしたことはないけど。

(聖良さん、今日も綺麗だなあ)

自分の席に座った聖良を横目でチラチ

ラと見ながら、詩乃はそんなことを思う。

祖母が英国人らしく、流れるような金髪は艶やかで、セーラー服に包まれている身体は日本人離れしている。

大きく張った乳房に、スカートから伸びる太ももはむっちりとしているけど太すぎず。

形の良いふくらはぎは黒のソックスがぴったりと密着している。

(はぁ……それなのにわたしときたら)

詩乃は病的なまでに色白。

それに小柄で、瞳は大きいけどジトツとしている。

しかもその小柄な身体には、二週間分のうんちを溜め込んでいるだなんて。

「はぁ……」

詩乃は人知れず憂鬱げなため息を漏らすと、再び読書へと意識を沈めていくのだった。



その日の詩乃は、移動教室の科目が無いことをいいことに、トイレに立つ以外はずっと自分の席から動かずにいた。

ずっと自分の席について、ファンタジー小説に意識を沈める。

教室で口を開いたのは、朝に聖良に挨拶をされたときだけ。

あとはたまに教師に指されて教科書を朗読したり。

それくらいしか詩乃は口を開かない。それほどまでに詩乃という少女は無口だった。

だけど詩乃自身は別にそれでもいいか
と思っている。

だから、今日も授業が終わって放課後
になったら、すぐに席を立って図書室に
行くことにした

(家に帰ったらゲームとか誘惑が多い
し、ね)

そんなことを考えながら。



「うーん、さすがに粘りすぎた、
か……」

ときは最終下校時刻が過ぎた18時1
0分。

初夏とはいえ、この時間になると薄暗
くなってくる。

昇降口で靴を履きかえるころには、詩乃の他には誰もいなくなっていた。

図書室で読書に没頭するあまりに、知らぬ間に時間が過ぎていた……というわけだ。

「帰ったら国語の宿題しないと」

そんなことを考えながら、たった一人で校門を出る。

詩乃のような年頃の女子が一人で歩くには、ちょっと不用心な時間帯になっていた。

詩乃は足早に家路を急ごうとし――、そのときだった。

ぎゅるるるる！

「おご!？」

お腹から発せられる急な危険信号に、詩乃は身体をくの字に曲げてへっぴり腰になってしまう。

ミニしているスカートから、お気に入りの猫さんショーツが見えそうになっているけど、今はそのことを気にしている余裕なんてなかった。

二週間ものあいだ眠りについてきた悪しき龍が、ついにお目覚めになったのだ。

「くうっ、ドラゴンの封印が……！」

セーラー服の上からお腹をさすってみると、お腹はパンパンに張っている。

更には大腸が不気味な蠢動をはじめたのではないか。

ぎゅるるるる……。

ゴポッ、ごぼぼ……っ。

「こ、これは……まずい……っ」

詩乃の額に脂汗が浮き上がる。

タイミングが悪いことに校門を出た直後。

しかも最終下校時刻を過ぎているから学校に引き返すことは許されない。

これから二週間もの便意を放っているうちに、昇降口の鍵を閉められてしまうに違いなかった。

「最悪なタイミングでドラゴンが目覚めるとは……！　こ、これは……ん
おおおっ」

ごぼっ、ごぼ……。

きゅるるるるるるっ！

お腹からの不協和音が止まらない。

大腸が不吉な蠢動をはじめ、二週間ものあいだ溜め込んだ不浄を吐き出そうと

していた。

メリ、メリメリメリ……ッ。

「あああ……だめえ……」

直腸がこじ開けられて、カチカチのうんちが漏れ出してくる。

二週間ものあいだ水分を吸収され続けてきてオリハルコンのように固まっている。

そんな伝説の金属に、詩乃の小さなお尻の貧弱な括約筋が抗えるはずがなかった。

メリメリメリ……、
ぷすっ、ぷすす……。

直腸から飛び出してくる棒状の硬質便は、形を保ったままでショーツへと漏れ出してくることになる。

「あっ、おっ、おご……っ」

閑静な住宅街の路地で、詩乃は足を止めてうんちをおもらししはじめてしまう。

家まであと20分——。

しかも、この腹痛だ。

もっと時間がかかるに違いない。

「まだ、だめえ……っ。あっ、うううう！」

もりもりもり！

ショーツが歪に盛り上がっていく感触。

更には重たくなっていく。

「せ、せめて……一歩、前に……」

メリメリメリ……ッ。

直腸を硬質便に貫かれながらも、詩乃は前へと進んでいく。

背中を滝のように汗が流れ落ちていき、ショーツへと染みこんでいく。

ぷすっ、ぷすす……。

ガスも溢れ出してきて、醜悪な香りが辺りに漂っていく。

下水道に長年溜まっているヘドロでもここまで酷い匂いはしないだろう。

二週間ものあいだ少女の体温で発酵し続けてきた、醜悪な香り。

その香りが、まさか小柄で可憐なセーラー服に身を包んでいる少女のスカートのなかから漂っているとは、誰が想像するだろうか？

周りに誰もいないことが、せめてもの救いだった。

(こ、これは……っ、家までもたない……っ)

メリメリ……ぶすす……ッ。

脂汗を流しながら詩乃は逡巡する。

このまま家を目指しては、ショットではドラゴンを封じておけない。

きっと家に辿り着くころにはショットから溢れ出してきてしまうに違いなかった。

それならば――、

「ここから近いところに……公園が、ある……っ」

家までの最短距離から考えると5分ほど遠回りになるけど、その公園には公衆トイレがある。

ただし、その公衆トイレは夜になると暗くて、あまり近づきたくはないスポッ

トではあるが……いまは贅沢を言ってもらえる状況ではなかった。

このままではショーツのなかに全部放ってしまうことになる。

「持ってくれ……、わたしの括約筋……！」

メリメリメリ……ッ、
メキメキメキ……ぶぼっ。

もっさりと重たくなっていくショーツをスカートで隠しながら、詩乃は薄暗い家路をよろめきながらも急いでいく。

「おっ、おおおお……っ」

低い呻き声を漏らしながら、なんとか辿り着いた公園。

その公園はブランコと砂場がある、必要最低限の狭い公園だ。

そんな公園の隅っこに、目指している桃源郷……というにはあまりにも汚く暗い公衆トイレはある。

「な、なんとかもってくれたぜ……」

とはいえ、もうすでに詩乃のショーツは硬質便でもこもこに膨らんでいて、スカートの上からでもうんちを漏らしているのがわかるほどになっていた。

それでも詩乃は公衆トイレを目指して歩を重ねていき――、

めりめりめりめりめり！

公衆トイレへと一步踏み込んだところで大量の硬質便をおもらししてしまう。

ショーツが落ちてきそうなくらい重たくなって、ミニにしてあるスカートから茶色く歪に膨らんだショーツがはみ出してくる。

もう、迷っている時間はなかった。

「一番近くの個室……！」

ただでさえ不気味な女子トイレは電気が切れているのか真っ暗だった。

詩乃はへっぴり腰になりながらも一番近くの個室へと駆け込もうとし――、そのときだった。

『うっ、ううう～……！』

女子トイレに、苦しげな女の呻き声が響き渡ったのは。

まるで怨嗟に満ちたかのような呻き声に、

むりむりむりむりむりむり！

詩乃の肛門は勝手に緩んでしまい、ショーツが更に歪に盛り上がっていく。

子供用の猫さんショーツの容量は少ない。

お尻の部分ではカバーしきれなくなった硬質便が前のほうにまで押しよせてきていた。

「な、なに……!？」

急に響き渡った唸り声に詩乃はビクリと身体を緊張させる。

ぶぽっ、むりむりむり！

こんなときだというのに、ショーツからは間抜けな音を立ててうんちが漏れ出している。

詩乃は、想像力が豊かなぶんだけ、怖がりなのだ。

この真っ暗なトイレだ。

もしかしたら過去に殺人事件があって、女の人地の縛霊がいまも苦しみ続けているのかもしれない。

詩乃の豊かな想像力は、一瞬にしてありもしない怨霊を作り上げていた。

それに、現にこうして苦しげな呻き声がトイレに響き渡っている。

『うっ、うううう〜〜〜！』

怨嗟に満ちた女の唸り声は、一番奥の個室から響き渡ってきているようだった。

その個室だけが、閉ざされている。

「あっ、いや……あああっ、あっ」

ぺたり。

詩乃は恐怖のあまりに腰を抜かし、尻餅をついてしまう。

ショーツのなかに満たされていた硬質
便が、

むりゅううう……、

ショーツのなかで潰れてお尻へと食い
込んでくる。

その気持ち悪い感触でさえも、いまの
詩乃には些細なことに過ぎない。

トイレから出ようと、足の力だけであ
とずさろうとする。

……が。

『うっ、うううっんんんん〜〜〜！』

個室からは更なる唸り声が聞こえてき
て、ついに詩乃の理性は決壊してしま
う。

ジュワッとお尻が生温かくなる。

詩乃は恐怖のあまりに失禁してしまっ
たのだ。

それに恐怖に緩んだのは尿道だけではない。

肛門も当然のように弛緩して、

しゅわわわわわわわわわわわわわわ……。

もりもりもりっもりっ、ぶふおっ！

ショーツから間抜けな音を立てながら、詩乃は失禁と失便をすることになった。

この瞬間、詩乃は自らが女であると言うことを忘れていたのかれしれない。

尻餅をついて脚をMの字に開き、猫さんショーツが丸見えになってしまっている。

ショーツは醜く歪に膨らみ、それでも詩乃は脚の力だけで後退しようとしていた。

だけど脚に上手く力が入ってくれない。



「あっ！ あっ！ あっ！」

ブボボッ、

ミチミチミチミチミチ……！

ショーツの足口から大量のうんちがはみ出してくる。

詩乃のうんちは、何度も便秘を繰り返すうちに肛門が広げられているせいで太くなっている。

その遅しすぎるうんちが、しっかりと形を残したままショーツからはみ出してくる。

それはまるで茶色い蛇のようだった。

「お願い……お願いだから……っ」

もりもりもりっ！

ぶすっぶすす……。

しゅいはいいはいいはいいはいいはいい……。

詩乃はいまにも泣きそうになって、それなのに下半身は言うことを聞いてくれずに失態を重ねている。

少女として、これほど間抜けなことがあるだろうか？

だけど詩乃にはどうすることもできず、ただただ恐怖のあまりに大小垂れ流しにするより他なかった。

やがて。

『はああああ……』

個室から聞こえてくる、恨めしげなため息。

この世に未練があるのか、なにか言いたげな、ネットリとした熱の籠もったため息だった。

それから個室のドアの向こうで、かすかな衣擦れの音が聞こえてくる。

まずい。

このままだと地縛霊がドアを開けて
こっちに来る……！

「あっ、ひっい、いやぁ……！」

もりもりもり！　ぶぼぼ！
にゅるるるるるるるるるる！

いつしかうんちは柔らかくなってい
て、肛門をくぐり抜けてショーツから溢
れ出してきている。

それでも詩乃は立ち上がって逃げるこ
とができなかった。

ただ、腰を抜かしてショーツが丸見え
になっていることにも気づかずに尻餅を
ついていた。

カコンッ、

詩乃が腰を抜かしていることも知らず
に、ついに個室の鍵が外される音。

にゆるるるるるるる！

ぶりっ、ぶりぶりぶり……っ。

ゆっくりと扉が開かれていき、詩乃は更に失便を重ねてしまう。

そして個室から出てきたのは――、

顔面蒼白な、真っ白の髪を振り乱した女だった。

あまりにも典型的な女の幽霊で、詩乃は恐怖のあまりに凍りついてしまう。

それでも肛門と尿道は言うことを聞いてくれずに垂れ流しになっていて――、

「あら、詩乃ちゃん……？」

「ひっ、ひい！」

ぶほほ！

幽霊に名前を呼びかけられて、間抜けな放屁をして気絶しそうになる。

それでも気を失わずに済んだのは、
思っていたよりも女の人の方が柔らかか
かったからだ。

それに、どこかで聞き覚えがあるよう
な……？

それも、ごく最近……それも、毎日。

「……ふえ？」

詩乃は間抜けな声を漏らして気づく。

個室から出てきたのは……、クラス
メートの聖良だったのだ。

真っ暗なトイレのせいでブロンドが白
髪にみえて、顔色は元々白いから不気味
に見えただけで。

「せ、聖良……さん？」

「そうだけど……、詩乃ちゃん、お尻の
あたりがなんか大変なことになっちゃっ
てるみたいだけど……」

「あっ、え？ ううー！」

慌てて捲れ上がっていたスカートの裾を整えるけど、匂いまでは隠すことはできない。

それに地面には大量のうんちがはみ出してきていた。

「あ、あの……、これは……その……っ。おトイレにきたら、ちょっと怖いことがあって……その……！」

「怖いことって……？」

「唸り声、だけど……」

「それって……もしかして、私？」

その問いには恥ずかしすぎて、黙って頷くことしかできなかった。

まさかクラスメートの唸り声を、地縛霊のものだと勘違いしてしまったなんて。

しかも恐怖のあまりにうんちまでおもらししてしまった。

「うう……穴があったら入りたい……」

「うーん……その気持ちはよく分かるけど、早くぱんつを綺麗にしないと誰かくるかもしれないから、ね？」

「綺麗に……、ああ、そうか、綺麗にしないといけないんだ……」

うんちをおもらししてしまって、ぼんやりとした意識のなか呟く。

まさかこのままでは帰るわけにもいかない。途中で誰に会うかも分からないのだ。

それにショーツはうんちでパンパンに膨らんでいて、このまま立ち上がればショーツからボトボトと落ちてくるに違いなかった。

——綺麗にしないと……。

——でも、聖良さんに見られながらパンツ脱ぐのは恥ずかしい。

そんなことを考えていると、しかしその数秒後に、聖良は恐るべきことを口にするのだった。

「おもらししちゃったぱんつ、私が洗ってあげるから、ね？」

「は？」

まさかのお言葉に、詩乃は素で返してしまう。

いま、聞き間違いでなかったら、とんでもないことを言わなかったか？

詩乃がフリーズしていると、それでも聖良は柔和な笑みを浮かべて、

「詩乃ちゃんがおもらししちゃったのは私のせいでもあるんだよね？ それなら綺麗にしてあげるのが私の責任だと思うの」

「た、たしかにそれは一理ある……ような気もするけどっ。でも大丈夫ッ。一人

でなんとかするからっ」

「一人でって……こんな暗いなかで、一人でぱんつを洗ってたら危ないと思うの」

「うっ」

聖良の言っていることは、一つ一つが説得力がある。

それでもまさかうんちをおもらししたショーツを見られるのは、同じ女子とはいえ恥ずかしすぎる。

「だ、大丈夫……っ。自分で洗うから……っ」

「いいから遠慮しないの。もしも詩乃ちゃんの身になにかあったら絶対に後悔すると思うから。だから、私に洗わせて、ね？」

「うう～……」

これ以上聖良の善意を無下にするのは

心苦しい。

だけどもおもらしショーツをみられるのも恥ずかしい。

詩乃が逡巡していると、それは唐突に訪れることになる。

ぎゅるるるるる〜。

それは聞いているだけで腸が捻じ切れそうになる不協和音。

てっきり詩乃は自分のお腹が再び痛くなってきたのかと思ったけど……しかしそれは違ったらしい。

目の前に立っている聖良が、

「あっ」

短い声を漏らすとお腹に手をあててみせたのだ。

どうやら、聖良もお腹の調子が悪くなってきたらしい。

「こ、これは……、久しぶりの感覚……っ」

「聖良さん、もしかして」

「うん……急にきちゃったみたい。その……、詩乃ちゃんを見てたから……」

「なるほど」

たしかにこんなに盛大におもらしをしているところを見せられたらお腹の調子だって悪くなってくるというものだろう。

「実はこのおトイレに駆け込んだのも急にお腹が痛くなったからで……それでもなかなか出てきてくれなくて……」

「えっ、聖良さんも？」

「私もって……、もしかして、詩乃ちゃんも？」

「うん……。なかなか出てきてくれないし、それなのに急にお腹痛くなってきて……」

「そっか。詩乃ちゃんもそうなんだ。そう
うだ、いいこと思いついちゃった」
「いい、こと……？」

**ここまで読んでくれてありがとうございます
体験版はここまでです！**

**次のページからは既刊のCGの紹介！
お楽しみください！**

大決壊シリーズの紹介っ！



